

幼児教育の十大原理 (二)



昇 地 三 郎

第四、賞讃の原理

教師の態度に二つの方向がある。一つは子どもの悪いところを見つけて、その悪い点を叱り、しつけようという態度と、子どものよい点を見つけてそれをほめて、伸ばしてゆこうという態度である。

大体に若い教師は前者の態度をとり、老練な教師は叱らないで立派に教育していつている。叱る教育と賞める教育のいずれをわれわれは選ぶべきであろうか。叱ることは子どもの情緒を不安にし沈ませ押しつける作用を持ち、ほめると子どもの情緒の不安は除かれて安定し、さらに積極的に働き出すことになる。子どもの心を伸ばすためには子どもをほめるべきである。子どもは叱れば叱るほど悪くなる。叱ることは、教師の無能や未熟や不安を子どもの側におおいかぶせて自己満足している場合が多い。子どもは敏感で全体反応

をし、こらっと叱られると小便をもらす子どもさえもいるほどである。ほめるということは、ほめることによって子どもがよくなるという信頼に立っているから有効的なのである。この態度をもてば、ほめるべきことをほめる。あたりまえのことをほめる。悪いことをした時でさえその中でよい点を見出してほめることができる。ほめることが有効であることは幼児教育に当たったことのある者は誰でも知っていることであろう。

賞讃に至るまでには黙認、承認、賞讃の三段階がある。児童の行動が自発的行動であれば、その内容が多少目的にはずれていても、また、いくらかよくないことであっても、自らやろうという意欲を尊重する意味においてその内容については無視したり、黙認することが適切である場合がある。幼児は教師やおとなの注意をひくために、好ましくない行為を敢てなすことがある。また、どのくらい

悪いことをすれば教師は叱るかしらという気持ちで、次第次第に悪いことをする場合がある。教師の愛情を得ようとしたり、注意をひこうとする場合は、その行為を見ても見ぬふりをし無関心を示すことが有効である。無関心が教育的効果をもつのである。また、児童の方で悪いことをした後必要以上に自責の念にかられたり、恐怖を強く抱いている場合、また自分で悪いことをしたことについて反省している場合も黙認した方が子どもに注意したり叱ったりすることよりも有効である。

次に児童の行為に対して、賞讃まではいかないが承認してやることが適切な性質のものがある。子どもから承認を求めて来るときは、もちろん承認してやる。子どもの方ではどうしたものかと判断や行為に迷っていることも多い。そうした時に教師が承認を与え、行動を促すと意欲を一層旺盛ならしめることがある。

次に賞讃であるが、児童の行動を力づけ、さらに意欲を盛上らしめるためには賞讃を行なう。賞讃はことばだけではない。態度あるいは表情だけでも行なうことができる。実際生活において叱責は容易であるが、賞讃は実にむずかしい。何となれば賞讃に値しないような行動をさえ賞讃しなければならぬからである。

賞讃の態度としては要求水準をさげるといふことである。その子どもの発達程度や能力との関係において賞讃基準はきまるものであ

る。それ故同じ行為がある児童には叱責となり、ある児童に対しては賞讃に値するものがある。もちろん同じ行為でも動機と結果によって違うし、おとなの規準と子どもの規準では異り、同じ年齢の子どもにおいても、その子どもの条件によって違うのである。

また全体的には叱責に値することでも、その一部については賞讃すべき筋合のものもある。賞讃規準は児童の能力とその情緒的発達との関係において定むべきである。その規準決定もさることながら、もっと重要なことはほめようとする態度を持つことである。教師はややもすると少しくらい良いことをしたのは、あたりまえのこととしてほめようとしなさい。むしろ叱責の構えの方に傾く場合が多い。賞讃しようとする態度は子どもの美点を見出そうとするものであり、子どもから美しきものを導き出そうとするものである。教師がほめようとする心構をもつと子どもの美点が目についてくるが、叱ろうという態度をとると子どもの弱点が鼻についてくる。子どもがほめられた時の表情を想像してみると、心理的満足がなし、さらに積極的な行為の原動力となることを充分知ることができであろう。

子どもを教師がいつもほめていると、子ども相互が相手方をほめるようになる。相手をほめることができるということは社会性の発達の指標でもある。子どもの心を伸ばすためには子どもをほめなけ

ればならない。子どもを悪くする一つの方法がある。それは子どもを叱りさえすればよい。ほめることによって子どもの心の扉を開くことができる。事例を示そう。

定君は生活年齢七才、知能指数七〇、脳性小児マヒ、症索性テンカン、頻尿で病院から病院をまわり就学猶予。

小学校に入学しようとしたところ母親にしがみついて泣き、入学前の身体検査及び心理テストを受けることができず、身体障害もあるので就学猶予を宣せられ、翌年しいのみ学園に入園、母親が近くのアパートに間借りして通学をはじめ。初めは母親にしがみついて離れない。一週間後漸く母親と離れることはできたが、何もしようとしなない。教室では新しいクレヨン二十四色入りを持ってはいるが書こうとしない。教師が「いいクレヨンだね、色がつくかしら」といって画用紙に〇を書いて見せた。「これ先生の顔だから目と口を入れてごらん」といって笑ってみせた。どうしようかとためらっていたが、左手で小さく目らしいところに点を二つ書いたので、教師が「上手だね、先生が笑っているところだね」といったところ口を書き、形は不均衡であるが足と手を書いた。それから次第に絵を書くようになり、教師は常に賞讃と承認を続けた。後に隣の子どもが定君は絵がうまいねとほめた。この時のほほえみは教師の賞讃よりも効果的であった。時期は遅れたが平がなもしろいのみ筆順で書く

ようになった。一人ひとりの能力に応じて作った夏休帳ものしみにして毎日書いたが、別冊の絵日記も毎日欠かさず左手で書くので時々左文字になったものもあったが立派に書いた。翌年の夏休全州絵日記コンクールで定君の絵日記が入選した。

第五、自信の原理

家庭で今まで自由に自己中心的な生活をしていた子どもが、幼稚園に入って来て、自分と同じくらいの年齢、同じくらいの背の高さの友達と生活をはじめると、ほかの子どもの動作が目につき、子どもながらに自分との比較をなし自己評価をする。競争意識も出てくる。自分が秀れている場合はいいが、少しでも劣っていることに気付くと、劣等感情を抱くことになる。

一たび劣等感情を自己の内部に生ずると、それを無くするために是非常な努力をしなければならぬ。

自分の家で思うままに生活していた子どもが条件の違った幼稚園という集団に置かれると不安感情を抱き、神経過敏となる。自分に気に入らぬこと、自分が負ける状態におかれると、よく大声で泣きはじめのものである。こうした子どもは泣こう泣こうと待ちかまえているといってもよいくらいである。情緒不安の状態に置かれているからである。一人っ子や末っ子などにこうした傾向が強くみられ

る。

母親と心理的離乳を充分していない子どもは母親への依頼心が強く、何でも自分でしようとしなくて母親や附添の人にしてもらおうと思う。母親がいなければ母親の代理として教師にしてもらおうとし、自分でやろうとしない。自分でやれば、よくできないという不安を先きに感じているからである。

子どもにこのような自信を欠乏させる原因は一つは家庭における母親の態度による。母親が完全欲が強く、何でも立派にやらなければいけないという要求水準を高くもっていると子どもに対して高い要求をするために、総ての場合に不安が先立ち、自信を失ってしまい、果ては劣等感を抱き、自己防衛機制よりして、自発性欠如に陥ってしまうことになる。

子どもの時に不全感即ち自信欠乏を生ずるとその自信欠乏に注意が固着して来はじめ、精神は過敏になり、情緒不安定となり機能は次第に低下して来る。一種の神経質症となってくる。神経質症の特徴は生理的あるいは心理的現象に対して、それを気にすまい、注意すまいとする合理的にみえる努力がはじまる。しかし原理的には気になり、心配し、不安を感じるのが当然であるような現象に対し、これを拒否し、なくしようとする努力は、むしろますます注意をそこに固着することになる。このように自己の状態や欲求に対し、完

全なものを求めて失敗すると、心のうちではそれを求めながらも、その失敗を予め予想し、動作を起す以前に既に予期不安を起しているのである。この状態は神経質症いわゆる慢性神経衰弱とも言うべき症状で、身体症状としては不眠、多夢、頭痛、頭重、めまい、のぼせ、全身倦怠、疲労感亢進、便秘、下痢、頻尿、心悸亢進などが起こり、精神症状としては注意散漫、記憶力低下、倦き易い、刺戟性、気分不安定、無気力、悲感的、一般的精神作業能力低下、などを来たすのである。

こうした児童は一つのことには没頭することができない。遊ぶことさえその遊びに没頭することができないのである。遊戯を習うという場合のように、何かを行なわんとする時に、それを為そうとする力以外に、それが自分にできるかしら、見ている人はどう思うかしら、誰か自分に注意を向けてはいないだろうか。このあたりでやめようかしらというようにいろいろな力が加わり、本来の目的の行動に対しては心的エネルギーが三分の二、四分の一しか注入することができない。この不安が失敗を産み、その失敗がさらに不安を深めるという悪循環を来たすのである。

自信喪失の児童に対して、心配するな、自信をもて、頑張れ、強くなれと、いくらことばで言っても聞かせても、如何に激励しても自信回復をするものではない。ことばでは自信は出てこない。實際経

験によらねばならない。経験療法の原理によって、その子どもにできる容易なことがらを完成するという経験を積み重ねてゆかねばならない。自己の要求水準を下げることに、自分の能力との関係において、自分で要求水準をたてて、完成の喜びを味わい次第に自ら為そうという意欲を生ぜしめるようにすべきである。教師は児童の能力に応じた仕事を与えて、為し得たという自信を持つようにすべきである。そのためにははじめに誰でもできるということをなさしめるとよい。フィンガーペイントや粘土が、こうした子どもに心理療法として用いられるのはそのためである。

絵や粘土、折紙、切紙細工などの作品を並べて誰のが一番よいだろうというように優劣の差をつけたり、競争を刺戟するような活動は避けねばならない。児童の作業の結果を問題としないで、児童の自発活動、自己実現、自己獲得を主眼とすべきである。自己活動に対し自信を持つことが、自己発達の基礎的役割を占めるものであり、同時に社会的承認を得る機縁となるのである。

児童の自信獲得のきっかけになるものは、友達から認められること、教師から承認されることである。こうした承認の機会は知的なものよりも行動的な分野において行なわれることが多い。たとえば、先生のお手伝をすること、教室の窓をあけること、あるいは家庭から教室の花を持って来ることなど、客観的にみれば、とくに足

らぬと思われるようなところにチャンスはいくらでもあるのである。

役割を与えることもよい。たとえば過番とか、委員とか係になることなど役割を持つことは自己の責任と使命感を感じ、他の多くの者に対する自己の地位の向上を内に感じ、自信を持つようになる。

子どもは背が低いとか、髪がちぢれているとか、洋服が皆のと違うとか、カバンが小さいとか、何でもないようなことに劣等感を感じ、多くの友達の前での行動に対して引つ込みがちになることが多い。劣等感を克服し、積極的に自信を持たせるようにしなければならない。

第六、三分前の原理

児童の教育に当って、その一人ひとりの児童の行動について予見することができると教育は非常に容易になってくる。科学の特質の一つはその予見性である。臨床心理学はその研究によって児童の予見を可能にするようにしなくてはならない。

医学においては予防医学が発達し、病気を未然に防ぐことの研究が盛んに行なわれ、その成果は目ざましいものがある。それと同様に教育においても予防教育という概念が成立する。その予防の内容

は心理学特に臨床心理学が担当するものである。医学においては前駆症状を非常に問題とし研究を行なっている。教育においても同様に前駆症状を捉えることをしなくてはならない。この問題を痛切に感じそれに努力するようになった理由は、次に述べるような必要性によったのである。

しいのみ学園には現在も症発性テンカンを有しアレビヤチンなどの薬物を投与している子どもがいるが、入園後間もない頃一人の男の子が運動場で大発作を起し大騒動したことがある。入園の時母親はその子に発作があることを言っていなかったし、先生たちも発作がどんなものであるかは全然知らなかった。ある時は三人の子どもが次々に発作を起こして病室に入りきらないで大慌てをしたこともある。それから発作について研究をはじめ注意してみると、季節、天候、温度、湿度、食事、睡眠、疲労などの影響の大なることがわかり、さらに、各児童にそれぞれ型は違うけれども前駆症状のあることを発見した。その前駆症状を捉えるための健康観察を行なうことにした。よく観察しているうちに次第に前駆症状のまたその前駆症状ともいべき現象を捉えることができるようになった。それ以来運動場や教室などで発作を起させることは全く無くなった。園児達は誰がてんかん持ちか全然知らないし、テンカンということばさえも知らないくらいである。

こうした苦い経験からして子どもが行動を起す三分前の動作からして推定して予見する、予見の原理を見出した。これをわかり易く三分前の原理と名づけることにした。子どもの催尿、催便、発汗、腹痛、空腹、喝水、発作などの生理的な現象では相当に予見することができるようになった。この三分前の原理の非常に役立ったのは子どももの喧嘩であった。子どもたちが喧嘩をはじめようとして、そのことを予見して、教師が互に緊張している二人の間に入ると、ボタンがはずれていなくても、ボタンがはずれているよといって、ボタンをはめるまねをしたり、じょうだんを言ったり、また二人の手を引いて向こうの砂場まで走ろうと云って、注意をそらして未然に防ぐことができた。

ところがあなたかも天気予報がわれわれをたびたび失望させるように予見もはずれることが少なくなかった。しかしよくよく観察し考察してみると、子どもの心理状態は案外に簡単なもので予見できるものである。一つの予見が間違つたならば、また次の予見を行なうべきである。われわれは決して子どもに対して一度や二度予見が当らなかったということでは絶望したり、自信を失ってはならない。子どもは新しくグループに入った時、周囲を警戒し、自己表現をしない。そして反抗したり過剰行動をしたりするものであるから、そういうしたことを予想し、子どもの仮装行動を洞察すべきである。

子見といっても、ただ見るだけでは充分ではない。子どもと接し、子どもに話しかけてみたり服装を直してやったり、用事をさせたりして関係をもちテストしてみても、どんな反応をするかによって子見の資料を見出すことができるものである。ところがあなたも教師の子見をされまいとしているが如く、子見に対する自己防衛として、さざえがしかりとふたを閉めたように縮まって動かなくなることがある。そうして教師をいつまでもこの姿勢で、自分に引きつけて置こうとするのである。こうした場合には二つの方法がある。一つは全然子どもを無視したかっこうで緊張をとり除くことと、他の一つの方法はその次段階で必要な場所に空間的移動をすることである。子どもは第一の防壁で破れば第二の防壁を守ろうとし、第二の防壁が破れば第三の防壁を死守しようとするものである。そうした場合に教師の方では精神分析学や第二の防壁に先き廻りして先手をうつべきである。

子どもの行動で疲労、催眠、拒食、火遊び、ガラス破壊、投石、逃亡、喧嘩、号泣甘えなどについて子見することができる。子見できれば予防することができる。先手をうつことは総てのことにおいて勝ちを制する戦法であるが、子どもの異常行動を起こさそうとする以前に先手をうつことが教育の一秘法というべきであらう。

教科を指導する日々の授業においても、児童の学習に対する興味

や持続や倦怠の子見をしつつ指導を進めなければならない。子どもが学習が厭になつてから、あくびをしたり、外に出たり、騒ぎはじめてから、大きな声で制止したり、叱つたりするようでは全く手遅れと言わなければならない。

指導する教材においても、児童がこの教材は理解が可能であるか困難か、何時間くらいすれば理解できるかの子見をしなくてはならない。指導してみたが、全く子どもには理解されなかったといううな無駄をするようではいけない。カリキュラムは子どもから浮いて作られてはならない。子どもの能力に応じた指導が行なわれるということとは、教師が子どもの実態を把握し、可能性を子見して立案されるからである。現在の能力とその発達の次段階である。三分前を見て教育計画を立てることにより、実習的な子どもの喜びの指導が行なわれるのである。

気象学が天気予報を行なつて種々の注意警報を出して、障害を防止しているように、また医学において予防医学が研究され、ワクチンなどで病気を予防するように、教育において児童の心理や行動の三分前を子見をして指導を行なうようにしなければならない。

(福岡学芸大学・しいのみ学園長)